

論文内容要旨

論文題目

生活保護現業員の自己効力感の情報源に働きかける介入
プログラムの評価

教育・研究領域：生涯生活支援看護学

氏名：赤間 由美

【内容要旨】

本研究は生活保護現業員のメンタルヘルス向上のために自己効力感の情報源に働きかける介入プログラムを作成し評価することを目的とした。

対象はA県内の3市の生活保護現業員で、B市・C市を介入群、D市を対照群とした。介入群には自己効力感の情報源である自己の成功経験、代理的経験、言語的説得を強化した事例検討を実施し、自己効力感の情報源等の変化を群間で比較し評価した。

B市では中間時点で自己の成功経験と言語的説得で、介入終了後では代理的経験で正の関連を認め介入効果を確認できた。C市では介入終了後に自己の成功経験と言語的説得で負の関連を認めたが、介入効果を示す肯定的な意見感想が多く、一定の介入効果を確認できた。

生活保護現業員の自己効力感の情報源に働きかける介入プログラムは効果が認められたが、実施の際には生活保護率増加等の業務状況を考慮する必要性が示唆された。

平成 31 年 1 月 7 日

山形大学大学院医学系研究科長 殿

学位論文審査結果報告書

申請者氏名： 赤間 由美

論文題名： 生活保護現業員の自己効力感の情報源に働きかける介入プログラムの評価

審査委員：主審査委員 布施 淳子



副審査委員 森鍵 祐子



副審査委員 小林 淳子



審査終了日：平成 30 年 12 月 26 日

【 論 文 審 査 結 果 要 旨 】

近年の生活保護行政において、生活保護の複雑困難事例の増加により生活保護現業員の負担は増大しており、メンタルヘルス対策は急務である。研究者らは生活保護現業員のメンタルヘルス不調の予防要因として自己効力感との関連を明らかにした（赤間ら 2014）。自己効力感是自己の成功経験、代理的経験、言語的説得、生理的情動的状态の 4 つの情報源に働きかけることで高めることができ、メンタルヘルスへ好影響を与えることが報告されている。また生活保護現場では集団での事例検討が悩みの共有ややりがいにも有効であることが報告されている。しかし、これまで生活保護現業員の多忙な業務に即したメンタルヘルス対策に対応する介入プログラムは存在していない。

本論文は生活保護現業員のメンタルヘルス対策として、集団の場を活用した自己効力感の情報源に働きかけた事例検討が効果的に作用することを仮説として介入プログラムを考案し評価した研究である。本介入プログラムは生活保護現業員に対し定期的に開催される事例検討会を活用し自己効力感の情報源に働きかける仕組みを構築した。本介入プログラムは A 県内の 3 つの福祉事務所を対象とし B 市（15 名）、C 市（7 名）を介入群、D 市（7 名）を対照群に実施した。調査内容は基本属性、疾病の有無、生活習慣、生活保護関連業務の状況のほか、主要アウトカムとして生活保護現業員の自己効力感の情報源、自己効力感、メンタルヘルスを用いた。自己効力感の情報源と自己効力感は Visual analogue scale で、メンタルヘルスは GHQ12 で測定した。分析は各変数の一次集計の後、重回帰分析を実施した。また、数量的評価を補うために介入プログラムの感想を質的記述から分析した。その結果、主要アウトカムでは B 市で代理的経験が有意に高く、GHQ12 得点は有意に低かった。ベースラインを調整した重回帰分析の結果、B 市において中間調査時点で自己の成功経験と言語的説得への正の関連が、介入終了後では代理的経験への正の関連が認められ、意見感想の質的記述的分析でも重回帰分析の結果を支持する内容で介入プログラムの効果を確認できた。C 市では介入終了後に自己の成功経験と言語的説得への負の関連を認め、生活保護率の増加や残業時間、日常業務の難しさの影響が考えられた。質的記述的分析では否定の内容のコードも認められたが肯定のコードも多く、介入プログラムの一定の効果を確認できた。本論文の功績は看護学の実践に貢献できる知見である。よって、本論文は新知見が得られており、看護学博士論文として相応しく、審査基準を満たしていると判断した。